



冬の白い花



冬木旅人

不器用な私が、針で自分の指をさした

布が赤色に染まった 涙も落ちて ゆっくり滲んだ

それでも私は刺繍を続けた

懸命に続けた刺繍は私繡となった

何回も何回も私繡を作り続けた

いつしか希望をあの柔らかい布に縫うことができた

そのとき私繡は志繡となった

希望はずっと私を支えた

何年も何年も私は希望に支えられた

希望がいなくなったとき、

志繡は死繡になった

たくさんの死繡が何千年も重なり続けた

死繡は史繡となった

私は繡を言葉にした

不器用に言葉にした

極めていびつだったが、

死繡は詩集となった

わたしはまた刺繍を始めた

詩を書こう

さあ、詩をかこう

鉛筆と紙でつくる自分だけの小さな世界

美しいもの

わくわくするもの

ふわふわしているもの

今まで見たことの無い景色がそこに広がっている

湧き出てくる好奇心は永遠で

自分ですら留めることができない

真実というのは

詩の中に確実に存在する

さあ、詩をかこう

霧と山賊

遠い遠い眠りから目覚めたら

白い白い霧の世界

暗い峠の高み この道を

現から消してしまうのだ

霧は雪と調和して

寂しく山を彩っている。

霧の世界でただ暮らすのは

この世で最も哀れな山賊だった。

傷つきたくない、傷つけない

それ故に彼は涙を流す

涙は雪をまた降らせいつまでも冬を終わらせぬ

霧は夜を深くして

山賊は一人、山を降りて

美しいものを見たかった。

明るいものを見たかった。

半月の照らす道に行く

言葉を器用に紡ぐことのできぬ

山賊は自分の惨めな存在を

詩にすることもできないのだ

霧はまだまだ続くのだ

冷たい風がただ吹いて

山賊の行く手をただ阻む

何千年前の誰かの痛みを

山賊はすごくわかった気がした

この旅の終わりに山賊が

最期にみるものは一体何なのであろ

ブランコ

のんびりブランコゆらゆら揺れる

静かに揺れる

風に吹かれて

誰も乗せずに

辺りの空気をちょっとだけ変えて

ゆらゆら揺れる

ただひたすら

数え切れない孤独を抱えて

揺れるこのブランコが

世界でたったひとつの真実なような気がした

日暮れ時

空 未知なる空間が

赤ね色に染められて

人の夢はそこで散る

日暮れ時に生きた人々は

青い空を知らない

赤い赤い日輪が燃えるのを見るのみである

鳥が赤ね空を舞うならば

射たれて散って雲になる

のこった一羽を射落とせ友よ

古小屋

松林をぬけた

誰も気づかない

丘がある

その丘には古い小屋

がぼつんとたっている

捨てられた小屋は

老いて尚主人の帰りを待つのみ

古小屋の周りには柵が咲いていた

柵が目立たぬ小さな 白い花が雪に見える 時、

古小屋の主人は

帰還するだろう

小川

春になろうとするときに

山の雪が溶けだして

茶色の落ち葉の上を下っていく

木々から漏れるたくさんの光線によって

様々な色に彩られながら

小川の流れは急に速くなる

やがて、山を出て春を伝える

歌え旅人よ小川の詩を

強く吹く風

何千枚、何万枚もの葉が

吹き荒れる今日の日

長い旅は始まる

澱んだ空気を遠くに避けて

向かうのだ西へ

この強風は向かい風か追い風か

この谷にいっぱい吹いている

長い長い人の夢は終わることなく

ただ風となるのだ

大青空の如き夢

未知なる草原から

見える大青空は

世界の夢

爽やかなそよ風、大嵐

白い雲 黒い雲

人の夢は大青空の如し

いつか見た雨

失われた光

響く水の音

静かに雨は降っている

少し寂しげに傘が笑う

うすいグレーの今日だった